

グローバル社会を見抜く力が 国際社会の未来を拓く

仕事帰りに学べる 男女共学の夜間大学院

本学の国際協力研究科は、グローバルな社会システムを洞察し、揺るぎない国際人を養成することを目的としている。

アクセス至便な六本木にキャンパスを置く男女共学の大学院で、社会人が働きながら学べるように、授業は平日の夜間および土曜日の昼間に開講されている。4月と10月入学のセメスター制や長期履修学生制度を導入しているため、職場の事情に合わせて入学時期や修了時期を選ぶことができる。

また、経済、国際関係、政治外交、地域研究と各分野から著名、かつ経験豊富な指導者が集合し、院生の勉学意欲に応えている。

国際協力のあり方を 社会科学的・実践的に探求

「国際協力」とひと口に言っても、開発の領域をはじめとして実にさまざまな分野がある。

本研究科では、国際協力における問題を国際社会領域と国際協力領域の2つの視点から社会的かつ実践的に探究する。また、日本としての国際協力のあり方を研究するために、共通領域科目群には基礎科目と地域研究科目があり、それぞれの領域に相応しい専門科目が置かれ、理論的知識を学ぶ一方で、ワークショップ科目、特殊講義、さらに国際協力領域ではインターシッピングやワールドワークといった実習も配置されている。研究の集大成

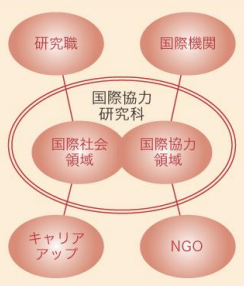
となる修士論文指導は1年次後期から履修可能となっている。

■「国際社会領域」と「国際協力領域」
「国際社会領域」には主に研究職やキャリアアップを目指す人、「国際協力領域」には主にNGOや国際機関等の国際協力分野で活躍したい人を対象とした科目をそれぞれ配置している。そのためこの2つの領域は、進路別の履修モデルとして参考にすることもできる(図参照)。

■科目等履修生制度
正規に入学する道以外に「科目等履修生制度」、「プログラム履修生制度(最長2年間で学可能)」があり、毎期募集されている。ここで取得した単位は入学後に10単位まで修了単位として算入できる。

■視野を広げるオムニバス講義(国際協力ワークショップ)
国際協力研究科では実習を重視しているため、オムニバス形式の講義を設置している。これは毎週異なる国際機関やNGOなどから国際協力に携わる関係者を講師に招き、活動状況や問題点などについて報告や講義をしてもらい、応答の時間もしっかりあるので、国際協力の目的をあらためて考察できる講義となっている。

国際協力研究科の 進路別履修モデル



論文執筆を通して、国際政治に対する持論を検証・深化



国際協力研究科国際協力専攻 2年
成田るりこさん

国際協力・国際政治の専門家 多彩に揃った教授陣

国際協力研究科には、国際協力領域と国際社会領域があります。私の関心分野は中東の国際政治で、領域でいうと後者になります。

中東の専門家であらっしゃる池田明史教授の論文を読んで、ぜひこの教授にご指導いただきたいと思い、この大学院に入ることを決めました。池田教授をはじめ、この大学院には国際政治の教授が多数いらっしゃいます。国際政治の理論や、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、北米といった各地域の国際政治の専門家など多彩な顔ぶれなので、私の修士論文のテーマでもあるイラク戦争についても、複数の先生の見解を伺うことができます。国際協力に関心がある人にも、国際社会に関心がある人にとっても、魅力のあるカリキュラムが組まれています。

また、交通至便な六本木に位置しているの

も、通学に便利など、メリットの一つだと思います。

落ち着いた研究環境の中 少人数で年代を越えて研鑽

私は学部生のときは、学生数の多い大学の政治学科に所属していました。大教室で100人、200人という学生に対して、教授が一方向的に講義を進める形です。それに対して、東洋英和の大学院では、3人から多くても12人と少人数で、すべての授業が教授との対話形式です。事前準備がたいへんですが、とても充実しています。学生の年齢層は20代から60代と幅広いのですが、歳の差を忘れて共に研鑽の日々を送っています。

この大学院は、図書館や事務のスタッフも非常に親切です。文献の検索の仕方がわからないときには、すぐに教えていただくことができ、丁寧に対応していただけます。

私のお気に入りには、都心ながらも窓から緑の見えるコンピューター室で論文に取り組むひと時です。閑静で落ち着いた環境の中で研究を進めることができるので、社会で働いてきて学問的探究を深めたい人にとっては至福の空間だと思います。

資料の検索や文章の組み立てなど 論文執筆のノウハウを学ぶ

修士論文のタイトルは、「エジプト・ムバー

ラク大統領の外交 イラク戦争を中心として」です。私は学部のころから中東地域の政治に興味があり、卒業後もニュースはまめにチェックしていました。漠然とはありますが、自分の考えがまとまってきたので、論文という形にまとめたいと思い、大学院に入りました。

私は語学学校でアラビア語の講師をしながら、家では主婦業をこなしています。今は子どもが成長して手を離れましたが、私の年代ですと親の介護でたいへんな方もいる中で、私は自分の研究のために時間を使うことができ、たいへんありがたく思っています。

大学院に入ってから、資料の検索方法の多様さに驚きました。図書館ではデータベースからさまざまな文献を閲覧することができます。いろいろな資料を引用して、論文として組み立てていくわけですが、思うような文章にまとまらず、悩むことも多々あります。指導教授からの確かなアドバイスをいただいて、少しずつ、論文が形を成していくことに喜びを感じています。

実はこのたび、研究機関で非常勤の専門分析員として働くことになりました。自分の研究が少しでも生かせればと考えています。

※注

『日経大学・大学院ガイド2010年秋』の原稿をもとに作成しており、実際の出版物とは異なります。 東洋英和女学院大学大学院